



広島城北高等学校サッカー部OB会
広島市東区戸坂城山町1-3 広島城北学園内 〒732-0015
電話 082-229-0111 FAX 082-229-0112



感謝

46回生 柴田 寛之

こんにちは。46回生の柴田寛之です。先日岩井先生から依頼を受け、OB会報誌を書かせていただくこととなりました。私は本年から鳥取大学医学部医学科に入学し、またサッカー部にも所属し充実した日々を送っています。

私は大学に入学するまでに三浪しました。この浪人中の三年間は本当に辛くしんどい毎日でしたが、今となつてはこの期間の間に勉強以外の面で本当に多くのことを学べたと感じています。私がこの浪人中に一番感じたことは、自分がいかにいまままで周囲の人たちに支えられていたのかということ。この三年間本家に家族には感謝してもしきれないほど助けてもらいましたし、宮本先生、岩井先生、黒瀬先生をはじめとした城北の先生方、友人達にも本当に色々な面でお世話になりました。自分が大学に合格することが出来たのは、自分の努力の結果というもの以上にこういった周囲の方々のお陰だと感じています。これまで支え、助けて下さった皆さんに応援してよかつたなと思つてもらえるよう、立派な医師になることを目指して頑張つていきたいと思つています。

他にこの浪人生活で学んだことは、自分の目標を決してぶれることなく持ち続け、こつこつとひたむきに今の自分が出来ることをしつかりやれば、向き不向きというものがあるので努力が必ず実るわけではないけれど、それでも自分がやってきたことに對するそれなりの結果は出てくるんだなということ。終わつてみて考えると、浪人生活では良くも悪くも普通では体験できない経験をさせてもらえたように思つています。この経験を無駄にしないためにも、これからも常に自分の中で目標を明確に持ち、ひたむきに取り組んでいきたいと思つています。



高校から大学。そしてまたその次へ。

46回生 谷川 正高

こんにちは！46回生の谷川正高です。この度、岩井先生からOB会報誌を執筆させていただく機会をいただき、大変光栄に思つています。

OB会報誌ということ、僕自身の紹介と現状報告を少々。僕は2011年に同志社大学に入学し、今年で4年生になりました。サッカーはサークル活動として続けています。中学、高校と僕のポジションはGKでした。大学ではそのイメージを改め、フィールドプレイヤーとしてのデビューを目指していたのですが、入部したサークルのレベルが高く、今も尚GKとして頑張つています(笑)

僕の通う大学では、サッカーサークルによる、体育会とはまた異なつたリーグ戦が年間を通して行われており、大学に入ってからかなり高いモチベーションでサッカーをすることができています。そして、更に嬉しいことに、そのサークルには城北サッカー部の後輩が3年続けて入部してきています。城北の「縦」の繋がりを大学でも感じることができ、中学、高校と過ごしたサッカー部での生活が、現在でも自分の中で大きな存在であると感じています。

さて、前述の通り同志社大学にはサッカーサークルによるリーグ戦が存在します。このリーグは学生のみで運営していくもので、審判やHPでの広報活動、地域企業への協賛依頼など全てにおいて学生によって行われています。僕はその運営委員の代表を1年間務めたのですが、この経験は僕に城北で学んだことを思い出させてくれるものでした。城北では本当に多くのことを学びましたが、今改めて自分の中で大事にしていることは「面倒くさいことでも自ら率先して引き受ける」ということです。リーグの運営とは本当に面倒くさいことばかりでした。しかし、その面倒なことに對してどれだけ自分から本気で近づいていくか、これが本当に大事でした。共に運営していく仲間からの信頼はもちろん、リーグに参加する10チーム以上のサークルからも信頼を勝ち取つていくには、まず自分が目の前のことに對して本気で取り組んでいく姿勢が必要だつたと感じる事ができています。自分が動くことによつて、周囲の反応や動きが変わつていくことに気づくことが出来ました。

僕がこのOB会報誌で伝えたいことは、自分の周りの環境を決めるのも、物事に対する自分の姿勢であり、アプローチの仕方なのだということ。うまくいかない時こそ、自分の姿勢を改めてチェックし、周囲の環境を自分の手で変えていく、今後何かに躓いた時にはこのことを思い出したいと思つています。大学生活も残り一年、来年からは社会人と

して新たなスタートを切ります。新たなステージに進む前に、城北で学んだこと、人として大事なことを思い出出すことができるといいな。今、心の底から感じてます。ここまで読んでくださった皆様、あらゆる場所で活躍されていること、学生として頑張っている人、社会人として必死に働いている人、結婚して新たな家族を持った人、みんな新しいステージを目指して、今を必死に頑張つていきましょう!!



最上段が教えてくれたこと

48回生 松下 太

はじめまして、48回生の松下太です。今回OBとして会報誌に文章を書くことに喜びを感じるとともに、このような機会をあたえてくれた先生方に感謝しています。

今回は最上段で学んだことを二つ、そして大学に入学して感じたことを書きたいと思つています。

まず最上段で学んだことについて書きます。一つ目は仲間の大切さです。ぼくは中学の時はFWをやつていましたが、高校にあがつて自分のFWでは通用しないといわれ、サイドバックをやることになりました。正直自分のやりたくないポジションをやるのはつらかったです。みんなが好きなポジションをできるわけではないのはもちろん頭ではわかっていましたが、それでも慣れないポジションでうまくいかなかったり、チームの足を引っ張つてしまつたりしたときに、やめようと思つたことはいっぱいありました。それでも続けてこられたのは仲間がいたからだと思つています。サイドバックをやめたいという話も嫌な顔せず聞いてくれ、先生にぼくをFWにしてくれようと言いました。先生にぼくをFWにしてくれようと言いました。結果、高3のときはボランチをやらせてもらいました。もしサイドバックをやつていたら楽しくない高校サッカーになつてしまつていたかはわかりませんが、確実にいえることはボランチでの高校サッカーはとびきりに楽しかつたとい



会報誌に寄せて

広島城北高校サッカー部OB会長 19回生 吉川 英司

うことです。これも全部まわりのみんなのおかげです。二つ目は感動は人から人へと伝わっていくものだと感じています。試合をしている本人たちが試合に勝ったり、いい試合をして感動するのは、そこまでがんばってきたから当たり前だとも思います。でも実際は、試合を見て親や先生たちも感動してくれいます。これってほんとにすごいことだとも思います。人生の中で何回心の底から感動するかわかりませんが、僕が20年生きてきたなかでは、まだサッカーでしか感動していません。そんなめったにない「感動」というものを、サッカーを通じて人に伝えられるのです。これからの仕事についてもまわりといっしょになって感動できるようなことをしたいです。最上段でそれができるとは思っています。

次に大学に入って感じたことを書きたいと思います。大学に入って世界が広がり、いろんな人と出会った中で一番思ったことは、人の深みはその人が関わってきた人の数で決まってくるんだなあということ。サークル活動の中で社長さんや外国の人、海外にたくさん行っている先輩たちと話す機会が多くあ

ワールドカップもベスト4が出揃い、本日に世界レベルの凄さを実感するとともに、「日本がこのベスト4に残る時期はいつだったか」という頃なかと真剣に考えながら会報を書いていきます。

サッカーはチームプレーと言いますが、この世界レベルになると「絶対的なエース」の存在の必要性はアルゼンチンVSイランの試合で決めた「メッシ」の1発が証明してくれるでしょう。

今回、日本のグループリーグ敗退に関して城北サッカー部OBで一度議論したいですね。ワールドカップは国の威信を賭けた戦いである事は言うまでもありませんが、この大会の為に何年間にも渡り、選手・スタッフ・協会関係者等がどの様な思いを馳せてこの日を迎える、結果としてどうだったのか？検証する事は本当に大事であると考えており、これは何事にも通じると思います。

私達の現役時代の様な、理屈のない根性論ではなく、各々の事象の理由を明確に説明しそれを検証する。その検証結果が予定通りでない場合は、その理由を見つけ再度トライする。その繰り返しだが真の実力へなっていくのではないかと思います。

ります。そういう人たちの価値観や人間的な深さという部分はとてつもないです。そういう人たちの数の差だとも思いました。いろんな価値観や信念をもった人とかかわって人間的な深みがでてくるのだと感じたんです。また、自分は運がいいことに、多くのOBや現役生と関われる機会がたくさんあります。この機会を大切にしていきたいと強く思います。これからもOBのみなさん、先生方、どうぞよろしくお願いします。まとまりのない文章になってしまいました。最後まで読んでいただきありがとうございます。



存在感を示せたのは「サポーター」ですか？これも立派なワールドカップという戦いの場での勝者だとも思います。普段の意識レベルの高さがそのままブラジルへ行っても時差なく同様な振る舞いが出るというのは本当に素晴らしい事だと少し誇らしくなりました。ブラジルワールドカップの優勝国予想は「アルゼンチン」というメッセージを残しワールドカップネタは置いときます。プライベートルームな話も少し。今年2年振りに「泉州大阪マラソン」に参加しました。今回は、前回の反省を生かし1KMあたり約6分のペースをキープし各足切りゾーンを無事通過するも、やはりまたまた25KMを越したあたりで突然のペースダウン。今回もまた30KM手前で時間切れとなりました。マラソンという競技を馬鹿にしている方いましたら、是非一度トライしてみてください。50歳前にして、必ず走破したいと思っています。

近況報告

みなさんこんにちは！ 24回生の岩井竜彦です。

現在は高山英樹先生（36回生）と一緒に、中学校サッカー部の指導に関わらせてもらっています。今年はゴールデンウィークの北九州遠征で勢いをつけ、4年ぶりに中学校選手権大会の県大会出場を果たすなど、中学生もしっかりがんばっています。

4月から、高校サッカー部は新しい顧問の先生を迎えました。米満 亮先生（祇園北高校、山口大学出身・28歳・国語科）です。おもにライノスの指導を担当し、熱い指導でチームに新しい風を吹き込んでくださっています。

そして、同じく今年からコーチとしてOBの藤井達也君（48回生）もチームに帯同し、選手のおき兄貴分として（実際に彼の弟が高2のサッカー部員です！）、チームの活動に大きく貢献してくれています。

また、中学校では引き続き佐柄正憲君（39回生）もコーチとして指導にあたってくれており、技術面のアドバイスはもちろん、他にも選手の相談に乗ったり、審判（これが本当に助かる！笑）も積極的にやってくれています。

佐柄・藤井両コーチだけでなく、これまでも猶崎コーチ（30回生）、高山コーチ（37回生）、聖川コーチ（40回生）をはじめ、たくさんのOB達がそれぞれの年代でチームに推進力を加えてくれました。また、サッカー部のホームページの管理は、菊一滋君（30回生）が一手に引き受けてくれています。

こんなに多くのOBがチームに関わっているのは、ひょっとしたら非常に稀なことかもしれませんね。でも間違いなく、これから多くのOB達がチームに力を与えてくれる、そう思っています。

毎年初蹴りであんなに多くの笑顔が生まれるのも、実は最高に素晴らしいことですよ！

宮本監督の口癖、「みんなが帰ってくる場所は、俺が人生をかけて守っていく。」

そのことば通り、最上段は我々の心のふるさととして、今もしっかり輝いています！

広島城北中学・高校サッカー部 コーチ 岩井 竜彦



QPONのひとり言

昨年の合宿中、息子さんが城北に通っている恵南義孝さん（17回生）が、ご家族でのお墓参りの帰りに寄ってくださった。恵南さんと挨拶を交わしていると、車の中から恵南さんのお母さんが降りてこられた。『ご無沙汰しています。』『宮本君、元気？』保護者会の役員をされていたのでよくお会いしていた。30年ぶりの再会…

懐かしさでいっぱいになった。合宿を終えた後、同級生でOB会長の吉川英司（19回生）を家家に送っていくと、妹の紀子さんが、これまた久しぶりで懐かしい。

今年の初蹴りには、それぞれお孫さんを連れて入川充夫君（37回生）のご両親と白木博隆君（36回生）のお母さんに来ていただいた。

そして、6月28日には、高山芳典君（37回生）と梶村亮太君（43回生）のお姉さんの悠利さんとの結婚式が…アットホームな雰囲気最高の結婚式でした。

私学の、母校の教員ってこんな感じなんかな… 何もできてないが、ここに居続けることだけでも価値があるのかな？だとすれば学校もここにあり続けることに価値があるのだろう。

最上段は、いつも、ここにある！

広島城北高校サッカー部監督 宮本 誠（19回生）